『源氏物語』「総角」巻の「いとほし」

――困惑しあう人々――

陣野英則

一　はじめに

「宇治十帖」の叙述に関しては、物語作家が次々と新しい叙述の方法を開拓しようとしているということを想定しつつ、「橋姫」「椎本」巻について[1]、また「宿木」「東屋」巻について[2]検討した。本稿では、それらの間に位置する「総角」巻を対象とする。「橋姫」から「総角」までの三帖は、「大君物語」または「橋姫物語」とも呼ばれるが、叙述のありようは「橋姫」「椎本」と大きく異なっているだろう。焦点化される人物に注目すると、「橋姫」「椎本」巻では薫と弁が際だっていたが、「総角」巻では、薫と大君それぞれの言葉が拮抗し、さらに中の君、匂宮への焦点化も無視しがたい。薫と大君が多弁であること、またその対話における伝達可能性と不可能性なども問題とされてきた[3]。また先の拙論[4]でとりあげた、作中人物と、物語る行為（また「物語」自体）との対応という点では、「橋姫」「椎本」巻において弁と薫がつよくむすびついていたが、「総角」巻では大君も加わる。

こうした「総角」巻の叙述の特質は、一読しただけでもおおよそとらえられるだろうが、この巻における主要人物それぞれの思惑をとらえる上で、「いとほし」という情意性形容詞の解釈が大いに問題になるとおもわれる。本稿はそこに着目する。先の「宿木」「東屋」巻をとりあげた拙論[5]においても、「いとほし」の解釈に言及していたが、「総角」巻では、この形容詞が全部で二十五例も用いられる。巻別用例数としては、長大な「若菜下」巻の二十三例をおさえて一位である（『源氏物語』全体では三八六例[6]）。しかも、「総角」巻の前半、「八月二十八日」に薫が匂宮を中の君のもとへと導きつつ、自身は大君を説得しようと言葉を費やすというあたりまでで（「総角」巻全体の分量に対し三十七％程度）、「いとほし」の用例は十七例ときわめて密集している。

これら多数の「いとほし」の意味は、はたして正しくとらえられているだろうか。『源氏物語』諸注釈書はいずれも、これら多数の「いとほし」の大半（もしくは全部）を「気の毒だ」「いたわしい」などと、他者への同情ないしは憐憫をあらわす語と解して

いる。一方、主要な辞典が示すこの単語の語義は、ほぼ共通している。『日本国語大辞典　第二版』（小学館）を例に挙げてみよう（用例は略す）。

①自分にとって面白くないと思う心情を表わす。つらい。困る。いやだ。……②他人に対する同情の心を表わす。かわいそうだ。ふびんだ。気の毒だ。……③弱小なものへの保護的な愛情を表わす。かわいらしい。いじらしい。いとしい。

……

右の①の語義を認めない論考も少なくないのだが（次節参照）、私見をあらかじめ述べると、『源氏物語』が書かれた時点での「いとほし」は、いずれも自身または他者に関わる物事への困惑・つらさなどをあらわすもので、右の②、「他人に対する同情の心」をあらわすのは、より時代が下ってからではないだろうか（なお、右の③「保護的な愛情」はさらに時代が下るだろう）。よって、これまでの「いとほし」についての理解を全面的に見なおす必要があると考えるが、この問題については、複数の別稿で詳細に検討する。[7]

本稿では、「総角」巻に対象を絞って論じるが、まず二節にて、「いとほし」の語義に関する過去の議論と見通しについて述べることとする。つづいて、三節では「総角」巻における「いとほし」の全用例について逐一検討してみる。誰が、誰について、あるいは何について「いとほし」と感じているのか、なるべく先入観を排しながら読みとってみたい。つづく四節では、「いとほし」から「心苦し」への転換をとらえるとともに、これまで「総角」巻の鍵語としてしばしば論じられてきた「へだて」の問題とリンクさせながら、「総角」巻の人間関係を新たにとらえなおしてみたいとおもう。

二　「いとほし」の語義に関して

「いとほし」の語誌については、「いとふ」と同根とする説と、「いたはし」の母音交替形とする説とに二分される。これを確定することは困難なようだが、いずれの説をとるとしても、「いとほし」が元々は、困惑・つらさをあらわしたとする認識は、『日本国語大辞典　第二版』ほか、『古語大辞典』（小学館）、『角川古語大辞典』、『岩波古語辞典　補訂版』などに共通しているようである。

しかし、困惑・つらさなどの語義を一切みとめない論も少なくない。[8]一方で、濱橋論文は、他者への気の毒な思いという一義に「偏向」する諸注釈・論考を批判し、困惑をあらわす例も確実にあると主張する。[9]同論文は、『源氏物語』に「気の毒だ」の意をあらわす例もあることをみとめているので、私見とは異なるが、傾聴すべき見解だとおもわれる。

それにしてもひとつの語の解釈がここまで大きく異なるのはなぜか。その理由に相当するであろう問題点が、宮地論文[10]において次のように指摘されていた。

このような情意をあらわす語は、自己へ向かうのか、他者へ向かうのか、また、嫌悪にかたむくのか、同情・憐憫にかたむくのか、本来その峻別は不可能であることが多い。また、

実際の文章上にあらわれていない主語や目的語の何を補うかという解釈によって、あるいは前後の文のどこに切れ目を置くかという立場によって、イトホシの意味の把握は異なってくる。

実際にみてゆくと、特に「いとほし」という感情の起因となる対象がとらえにくいようだ。

とにかく、この形容詞が本来は困惑・つらさなどをあらわすのだとすれば、同情・憐憫の意に限定しようという主張は、それだけでかなりの無理があろう。『源氏物語』成立以前に本来の語義が失われたということを意味するからである。にもかかわらず、同情・憐憫に語義を限ろうとするのはなぜだろう。たとえば、中川論文[11]が多数の例をあげ、かつ「心苦し」との差異も含め詳細に論じているが、同論文も有力な先行論として紹介する木之下論文[12]の提示する根拠が興味深い。そこでは、「いとほし」が困惑・つらさをあらわす場合もあることを夙く指摘した吉澤論文[13]を受け入れない理由として、「当時は、まず他者を思いやることが現代よりつよかったと思う」などと述べられているのである。平安文学に馴れ親しんだ立場からの推測だろうが、そもそもこの根拠自体が論証しえないのではないか。

それにしても、『源氏物語』の用例の大半は諸家によって同情・憐憫をあらわす語と解されてきたのだから、同情・憐憫をあらわす例をみとめないという私見に対しては、当然反論の出てくる可能性が高かろう。しかし、私見とは正反対の立場から発せられた見解ながら、「そもそも、どちらの語義を適用するかによって内容までが変わってしまう語義など両立しえないのではないか」という指摘[14]は、首肯すべきだとおもう。[15]もちろん、『源氏物語』が書かれるまでの間に意味変化が起きている場合もありうる。しかし、『源氏物語』の「いとほし」をみてゆくと、たしかに一見して「気の毒だ」などと解したくなる例が多いのだが、よくよく検討してみると、結局は次のいずれかに落ち着いてしまうのである。

・困惑をあらわしているとしか解せない、つまり同情をあらわしているとはいえない例

・困惑をあらわしているようにも、同情をあらわしているようにも解しうる例

一方、同情をあらわしているとしか解せない例は（あくまでも私見だが）まず見いだせないのである。この点、紙幅の都合でこれ以上は論じられない。「いとほし」の語義に関する整理はここまでとし、次節では「総角」巻の全二十五例を具体的に検討してみよう。

三　「総角」巻における「いとほし」の検討

以下、「総角」巻本文にみえる順にとりあげてゆく。本文の番号（丸付き数字）の下の（　）内には、「いとほし」という感情を抱く主体を示し、次いでその使用状況を示す。

①（〈弁の会話文内に引用された某女房の見解の箇所〉八の宮、姫君たちの結婚について）

「……〔八宮ガ〕おはしましし世にこそ、限りありて、かた

ほならむ御ありさまはいとほしくも、など古体なる御うるはしさに思しもとどこほりつれ、……」　（一五九一頁）

集成が「困ったことだ」と解する。他の諸注は「かわいそうだ」などとするが、「古体なる御うるはしさ」というややネガティヴな評価に合うのは、同情より困惑ではないか。

②（薫、大君の心中とその泣くさまを受けて）

……言ふかひなく憂し、と思ひて泣きたまふ御けしきの、いといとほしければ、かくはあらで、おのづから心ゆるひしたまふをりもありなむ、と思ひわたる。わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへきこえたまふ。　（一五九五頁）

薫が強引に大君のところへ押し入る場面からの引用。諸注「いたわしい」などとする中、鑑賞の通釈は「しのびない」と訳出する。ここで薫は、大君から「言ふかひなく憂し」と思われた（泣く様子からそう察したか）ことに困惑し、強引な態度を貫けなくなったのだとおもわれる。今井論文[16]では、この「いとほし」を「可哀相」と解しつつも、ここでの薫が「目の前の大君以上に、世間から今の自分がどう見えるかを気にしている」ととらえている。文脈の把握は首肯されるが、ここで「いとほし」と感じること自体、薫の心が大君に向いていないことを示唆しているだろう。なお、二重傍線部「心苦しく」は次節で扱う。

③（中の君、大君が薫と結ばれたこと〈もちろん誤解〉について）

……ところせき御移り香の紛るべくもあらず、くゆりかかる心地すれば、宿直人がもて扱ひけむ思ひあはせられて、まことなるべし、といとほしくて、寝ぬるやうにてもものたまはず。　（一六〇〇頁）

姉君が薫とついに結ばれたと気づいたとき、どうして妹君は姉君を「気の毒だ」「いたわしい」などとおもうだろう。諸注の中では、大系のみが「（移り香を恥じなされようかと）大君の御気持が御気の毒で」と理由を説明しているが、この理由づけは素直ではあるまい。ここは、まだ世間のことも男女の仲もほとんど知らない中の君が、どう対処したものかわからずに困惑して、寝たふりをしていると解する方がよほど無理がないとおもわれる。

④（大君、中の君を薫と縁づかせようという計画を中の君当人に伝えないことについて）

……けしきだに〔中君ニ〕知らせたまはずは罪もや得む、と身を抓みていとほしければ、よろづにうちかたらひて、……　（一六〇二頁）

「身を抓みて」は、わが身を抓って他者の痛みを知ること。この句自体が他者の痛みを感じることをあらわす。ゆえに直後の「いとほし」は、同じような意味でとるよりも、他者の痛みをおもい「つらく感じる」と解した方が妥当ではないか。ただし、「気の毒だ」と解することもあながち無理ではない例といえよう。

⑤（大君、中の君の反応を受けて）

……〔中君ガ〕なまうらめしく思ひたまへれば、げに、といとほしくて、「なほ、これかれ〔自分ヲ〕うたてひがひがしきものに言ひ思ふべかめるにつけて、思ひ乱れはべるぞや」と言ひさしたまひつ。　（一六〇三頁）

薫との結婚を奨められた中の君が「なまうらめしく」思っている

のを受けて、大君は、針本論文[17]が説くように、妹君の反応に「さすがに困惑し」、さらに直後の発言では、先に薫との結婚を奨めたのは「本心ではなく、女房達の言葉が私を混乱させた」ため、と「自己弁護」する。同論文は「いとほし」の語義を示していないが、まさに「困惑」の意であろう。

⑥（薫、弁の大っぴらな対応について）

客人〔＝薫〕は、かく顕証に、これかれにも口入れさせず、忍びやかにいつありけむこととともなくもてなしてこそ、と思ひそめたまひけることなれば、「御心ゆるしたまはずは、いつもいつもかくて過ぐさむ」と思しのたまふを、この老い人の、おのがじし語らひて顕証にささめき、さは言へど深からぬけに老いひがめるにや、いとほしくぞ見ゆる。姫宮、思しわづらひて、弁が参れるにのたまふ。

（一六〇四～一六〇五頁）

諸注のうち全集・集成・新大系・新全集・鑑賞は、大君にとって気の毒、と解する。しかし、「いとほしくぞ見ゆる」の直後で、あらたに語り起こすように「姫宮」（大君）という主体が示される。この呼吸をくみとれば、「いとほし」は大君ではなく薫に関する叙述と考えられよう（なお、全書・大系・玉上評釈・佐伯講読ではこの点が明確でない）。大君との関係が目立たないことを望む薫は、今のままでも構わない、ということを考え、そう話してもいるのに、弁が表立って対処しているのが、（傍からは）薫にとって「いとほしく」見える、ということであろう。薫を当惑させる弁のふるまい、ということで、同情・憐憫の域にはないとおもわれる（それゆえ、近年の諸注も「薫が気の毒」と解さないのだろう）。

⑦（中の君、大君のさまについて）

中の宮も、あいなくいとほしき御けしきかな、と見たてまつりたまひて、もろともに例のやうに御殿籠りぬ。

（一六〇七頁）

先の③と同様で、同情まで読みとる必要はあるまい。中の君が、ともに臥す姉大君の「御けしき」に困惑しているとおもわれる。なお、鑑賞は「見ておれない」と訳出している。

⑧（大君、身を隠したのちに残された中の君を見て）

〔大君ハ〕いと疾くはひ隠れたまひぬ。〔中君ガ〕何心もなく寝入りたまへるを、いといとほしく、いかにするわざぞ、と胸つぶれて、もろともに隠れなばや、と思へど、さもえ立ち返らで、……

（一六〇八頁）

薫の侵入を察して身を隠したのち、残された中の君の姿を見て大君はどう感じたか。諸注は「かわいそう」などとするが、自分だけ逃げたままで「かわいそう」とおもうのは、やや違和感がないか。むしろ置き去りにした自身の行為がもたらした状況に戸惑っている、という感がある。

⑨（〈⑧のつづき〉大君、残された中の君のところに薫が入って来るのを見て）

……わななくわななく見たまへば、灯のほのかなるに、袿姿にて、いと馴れ顔に、几帳の帷子を引き上げて入りぬるを、いみじくいとほしく、いかにおぼえたまはむ、と思ひながら、あやしき壁の面に、屏風を立てたるうしろの、むつかしげな

るにゐたまひぬ。〔中君ハ〕あらましごとにてだに、つらし、と思ひたまへりつるを、まいていかにめづらかに思しうとまむ、といと心苦しきにも、すべてはかばかしき後見なくて落ちとまる身どもの悲しきを思ひ続けたまふに、……

（一六〇八頁）

諸注、こちらの「いとほし」も「中の君がかわいそう」などと解しているが、ここでは、薫が「馴れ顔」で侵入したことを「いとほしく」感じ、その上で中の君の気もちを忖度しているのではないか。この「いとほし」も、自身ではどうにもできない困惑・つらさをあらわしているとおもう。ここでの大君の利己的なありようについては次節でも言及する。

⑩（薫、寝所に残された中の君について）

あさましげにあきれ惑ひたまへるを、げに心も知らざりける、と見ゆれば、いといとほしくもあり、またおし返して隠れたまへらむつらさの、まめやかに心憂くねたければ、これをもよそのものとはえ思ひ放つまじけれど、……

（一六〇八～一六〇九頁）

諸注のように、中の君への憐憫とする解釈も成り立ちうる例ではあろうが、（中の君のことではなく）事情を知らされぬまま中の君が残されたことに戸惑いをおぼえる一方で、大君の「つらさ」がなさけなく恨めしくもあるので、中の君をも他人のものにしてしまう気にもなれそうにない、ということが語られている可能性も充分考えられるのではないか。

⑪（大君、中の君の思いを推察して）

明けにける光につきてぞ、壁の中のきりぎりす、はひ出でたまへる。〔中君ノ〕思すらむことのいといとほしければ、かたみにものも言はれたまはず。

（一六一〇頁）

隠れていた大君が出てきて、中の君の思いを推察する際の「いとほし」だが、先の本文⑧・⑨との照応を考えるべきであろう。鑑賞の「語句解釈」（斎藤由紀子担当）では「中の君の思いを察していたたまれない」としており、首肯される。

⑫（弁、大君が身を隠してまで逢瀬を拒んだことについて）

弁はあなた〔＝薫ノ方〕に参りて、あさましかりける御心強さを聞きあらはして、いとあまり深く、人憎かりけること、といとほしく思ひほれゐたり。

（一六一〇頁）

たとえば新全集は「お気の毒さに茫然としている」と訳すが、同情と「思ひほる」こととは両立するだろうか。大君の予想外の対応に困惑して「思ひほる」と解すべきだろう。

⑬（弁ら女房たち〈「ささめきあ」う言葉〉、薫及び大君について）

〔薫〕「……また人にだにもらしたまふな」と怨じおきて、例よりも急ぎ出でたまひぬ。「誰が御ためもいとほしく」とささめきあへり。

（一六一一頁）

薫が怨みごとを言って出たあとの女房らの「ささめき」。集成は「薫も気の毒なら、こんなふうに厭味たらたら恨まれる大君もお気の毒」とするが、女房らは大君の対応に驚き呆れているのだから「どちらのお方にとっても困ったことよ」と解した方が自然だろう。

⑭（〈薫の心中における忖度として〉大君、自分（薫）が中の君

につれないことについて）

身を分けて、などゆづりたまふけしきはたびたび見えしかど、うけひかぬにわびて、かまへたまへるなめり、そのかひなく、かく〔自分ガ中君ニ〕つれなからむも、いとほしくなさけなきものに思ひおかれて、いよいよはじめの思ひかなひがたくやあらむ、とかく言ひ伝へなどすめる老い人の思はむところもかろがろしく、とにかくに〔大君ニ〕心を染めけむだにくやしく、……。

（一六一二頁）

諸注の多くは「大君への憐憫」（新大系）と解する（ただし、憐憫の対象が大君か中の君かを明示しない注釈もある）。中川論文[18]でも同様に解している。同論文も現代諸注も、「いとほしく」で読点を入れているが、おそらく「いとほしくなさけなきもの」が（薫の忖度による）大君の心中をあらわしているのではないか。その場合、「いとほしく」は薫の対応についての大君の困惑と解されよう。本文⑭の後半をみると、ここでの薫は老女房たちの思惑を気にした上で、大君に心を寄せたことまでも悔やんでいる。この文脈を重んずれば、傍線部で大君に憐憫の情を抱いていると解することは無理だろう。

⑮（〈薫の心中〉薫、大君の計らいについて）

……何ごともくちをしくはものしたまふまじかめり、と思へば、かのいとほしく、うちうちに思ひたばかりたまふありさまも違ふやうならむも、なさけなきやうなるを、さりとて、さはたえ思ひ改むまじくおぼゆれば、……

（一六一四頁）

「いとほしく」は「思ひたばかりたまふ」にかかる。いたわしくも計らいなさる、と諸注は解する。それで意味が通じないことはないが、「薫にとって困ったことに、大君がひとり心の内でお計らいになった」という解釈の方がより素直ではないかとおもわれる。

⑯（薫、匂宮が中の君のもとへ侵入したことを知らぬ大君について）

……〔匂宮ガ〕入りたまひぬるをも、姫宮は知りたまはで、〔薫ヲ〕こしらへ入れてむ、と思したり。をかしくもいとほしくもおぼえて、うちうちに心も知らざりける恨みおかれんも、罪さりどころなき心地すべければ、……

（一六一六～一六一七頁）

薫を中の君方へ「こしらへ入れてむ」という大君の思惑は、薫にとってたいそう困ることである。何しろ中の君方へは匂宮が入り込んでいるのだから。

⑰（〈薫の発言内〉薫、大君への嫌味）

「……やむごとなき方〔＝匂宮〕に思しよるめるを、宿世などいふめるもの、さらに心にかなはぬものにはべるめれば、かの御心ざしは異にはべりけるを、いとほしく思ひたまふるに、かなはぬ身こそ置き所なく心憂くはべりけれ。……」

（一六一七頁）

「あなたは匂宮の方へ思いを寄せておいでのようだが、……匂宮の目当ては別の方（すなわち中の君）でありましたようなので、困惑しておりますが、……」という意であろう。この「いとほし」は、諸注のように、気の毒などと解しても違和感がないかも知れ

ない。しかし、思いのかなわない自分の方こそつらいのだ、という訴えにつづいてゆくので、相手への同情より困惑を示していると解した方がよりふさわしいのではないか。

⑱（薫、匂宮の高貴な身のほどについて）

〔匂宮〕「……ところせき身のほどこそなかなかなるわざなりけれ」とて、まことにいとはしくさへ思したり。〔薫ハ〕いとほしく見たてまつりたまひて、……　（一六二五頁）

匂宮の窮屈な身に薫が同情している、と解されているが、この直後で薫は「今夜のお咎めは私が代わって受けるから、ぜひとも宇治へ行くように」とつよく奨めている。匂宮の自由の利かない身のほどにほとほと困惑した上での奨励と解すべきではないだろうか。

⑲（〈明石中宮の発言内〉明石中宮、匂宮について）

〔薫ガ〕中宮の御方に参りたまへれば、〔中宮〕「宮は出でたまひぬなり。あさましくいとほしき御さまかな。いかに人見たてまつるらむ。……」　（一六二六頁）

全書・大系・集成・佐伯講読は「困った」「困る」と解している。玉上評釈・全集・新大系・新全集・鑑賞は「情けない」と訳出する。ただし、新全集の頭注では、「女に心を奪われて深夜出歩くとはかわいそう、の意。わが子かわいさの、甘い母親の言葉」とする。この巻での明石中宮の匂宮に対する一貫した態度に照らしても、みとめられない説である。

⑳（薫、匂宮が来るのを待ちかねている宇治の姫君たちについて）

中納言の君も、〔宇治デハ〕待ち遠にぞ思すらんかし、と思ひやりて、わがあやまちにいとほしくて、宮を聞こえおどろかしつつ、絶えず御けしきを見たまふに、いといたく思ほし入れたるさまなれば、さりとも、とうしろやすかりけり。　（一六三二頁）

先の⑱と同パターンで、匂宮の宇治行きがかなわぬという事態を受けて「いとほしく」感じ、その後匂宮に宇治行きを督促する。ここでは自身の「あやまち」をつらく感じている。

㉑（大君、客間に遠ざけた薫から恨まれることについて）

〔薫ガ〕恨みたまふも〔大君ハ〕さすがにいとほしくて、物越しに対面したまふ。　（一六三二～一六三三頁）

恨む薫への同情と解することも無理ではないかも知れないが、相手は自分を恨んでいるのだから、むしろそのことに困惑したため物越しで応対することにした、とみた方がよい。

㉒（薫、大君より、匂宮に関することを聞いて）

……かすめつつ、さればよ、と思しく〔匂宮ノ無沙汰ヲ〕のたまへば、いとほしくて、思したる御さま、けしきを見ありくやうなど、語りきこえたまふ。　（一六三三頁）

薫は、大君から匂宮の夜離れを聞かされ「いとほしく」感じた結果、匂宮がいかに中の君に執心しているかということ、また都では宮をいつも気にかけていることなどを大君に伝える。これも⑱・⑳と同じく、匂宮の無沙汰を受けた「いとほし」で、薫の困惑をあらわすだろう。

㉓（〈薫の心内〉薫、匂宮と中の君の関係を中宮に伝えたあとの予想される事態について）

……忍びてかく通ひたまふよしを、中宮などにも漏らしきこしめさせて、しばしの御騒がれはいとほしくとも、女方の御ためは咎もあらじ、いとかく夜をだに明かしたまはぬ苦しげさよ、……　（一六三五頁）

諸注、匂宮への同情の表現とみる。それでも意は通るが、困惑の意とみてもやはり問題なく意味は通じる。匂宮方の「御騒がれ」というネガティヴな事態と、「女方」にとっての「咎」とが対になっている点を意識すると、困惑と解する方がよいのではないか。

㉔（〈大君の発言内〉大君、中の君の様子から、八の宮の遺言を想起）

〔大君〕「……亡き人の御諫めはかかることにこそ、と見はべるばかりなむ、いとほしかりける」とて泣きたまふけしきなり。　（一六四六頁）

中の君に対する姉からの同情の言葉と解されてきたが、「見はべるばかりなむ」に留意してみよう。ここは、「御諫め」の内容と重なる中の君の状況について「いとほし」と感じたのではなく、「御諫め」の内実を中の君の置かれている状況に見ている、そのことだけが「いとほし」なのではないか。とすれば、同情ではなく、困惑をあらわすことになろう。

㉕（薫、匂宮を中の君に手引きしたことについて）

中納言〔＝薫〕も、見しほどよりは軽びたる御心かな、さりとも、と思ひきこえけるもいとほしく心からおぼえつつ、をさをさ〔匂宮ノ所ヘハ〕参りたまはず。山里には、いかにいかに、ととぶらひきこえたまふ。　（一六五二頁）

これも匂宮の宇治行きがかなわないという事態を受けて、薫が「いとほしく」感じているので、⑱・⑳・㉒と類似する。ここでは、ここまで匂宮の夜離れがつづくことを想定していなかったことに責任を感じて、つらく思うということであろう。

以上、「総角」巻の用例すべてを確認してきたが、およそ以下のように整理できよう。

・困惑・つらさをあらわしていると解することができない例は皆無である。

・困惑・つらさをあらわしているとしか解しようがない例、及び困惑・つらさをあらわしている可能性が高い（同情・憐憫をあらわしている可能性が低い）例が大半である。

・同情・憐憫をあらわしているとしか解しようがない例は皆無である。

四　「いとほし」と「心苦し」、そして「へだて」の関係

「いとほし」の類義語とみられてきた「心苦し」も重要語というべきであるが、この両者の関係はどのようにとらえるべきか。「総角」巻では、「心苦し」も（その派生語を含めて）二十八例と大変多く用いられているが、この語は巻の後半（八月二十九日以降）の方に十九例と集中している。つまり、大雑把にいえば、八月下旬までの「いとほし」中心のやりとりから、「心苦し」へと切り替わっているともいえそうである。

「心苦し」の語義については、今後精査してゆかねばならない

が、ここでは「いとほし」との対比がしやすい、先の本文②を例に考えてみよう。「言ふかひなく憂し」と泣きしずむ大君を前に薫は困惑し（「いとほし」）、大君の「心ゆるひ」を待つことにした。その直後で「わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへきこえたまふ」と語られる。平安時代の「心苦し」は、自他のいずれについても心の痛むさまをあらわすようだが、この二重傍線部は、他者（大君）を思いやる語と解して間違いあるまい。このように同じ場面で「いとほし」と「心苦し」の両方が用いられる例は、この巻でしばしばみられる。

ひとつの場面においても、また巻全体としても、「いとほし」から「心苦し」へ、という展開が看取されるようである。そうだとすると、たとえば薫、大君、中の君の三者の関係について、従来のとらえ方をいささか更新する必要があるのではないか。たとえば、大君と中の君の姉妹関係はどうか。「男の侵入の後の気まずい沈黙によって引き裂かれる」[19]とされる「姉妹の連帯」だが、引き裂かれるときに際だつのが、姉妹それぞれの自己完結的にして利己的なありようともいえよう。「いとほし」と「心苦し」ともに「同情を表す」とみる立場ながら、この二語の差異に留意する中川論文は、本文⑧・⑨で「いとほし」ばかりが用いられ、「心底気づかう「心苦し」がみられるのは屏風の背後に逃れた後」、すなわち⑨の引用本文末尾近く（二重傍線部）であることに注目して、大君の、また「人間の裡に潜む利己的な心の動き」をみている。[20]「心苦し」と「いとほし」の差異への着目は首肯されるが、そもそも「いとほし」は、妹君へと向かうことのない困惑をあらわしていると考えられる。つまり、大君の利己的な面は当初からテクストの表層にあらわれていた。

対する中の君もまた、本文③・⑦において「いとほし」と感じていた。この妹君のおっとりとした性格はしばしば語られていたが、言葉のレヴェルではこの「いとほし」の語とともに姉との齟齬が生じているといえそうである。宇治の姉妹の連続性はきわめて重要だが、この姉妹の物語は、「話型を越えて、個人が重視され[21]」る方向へと進んでいるようだ。「いとほし」に示される困惑・つらさといった感情は、まさに個へと向かうものであった。

「いとほし」と感ずる主体としては、もちろん薫を逸することができない。また、弁（及び同僚の女房たち）の用例もあった。薫と弁に関しては、「橋姫」「椎本」巻でもきわめて多弁であったし、特に薫は宇治の姫君たちに対してさまざまな感情を抱いていたが、この両巻における「いとほし」の用例は計八例、そのうち薫と宇治の姫君たちに関わる例は一例のみである。それは、弁の「問はず語り」によって自身の出生に関わる秘事を姫君たちも既に知っているのではないか、と薫が「推しはか」り、それが「ねたくもいとほしくもおぼゆる」（椎本、一五六九頁）という箇所である。既に論じたように、[22]ここでは、姉妹が秘事を知っていると想像されるがゆえにこの姉妹からは離れられない、と思考する薫のありようが、まさに薫個人の困惑をあらわしていた。こうした薫の「いとほし」という感情が、「総角」巻では幾度もあらわれているのであった。

＊

最後に、「総角」巻における鍵語としてしばしば論じられてきた「へだて」と、「いとほし」という語との関係について考えてみたい。最初に薫が強引に押し入った折、大君は「物へだてななど聞こえば、まことに心のへだてはさらにあるまじくなむ」（一五九七頁）と話した。この逆説的メッセージは、「総角」巻での二人の関係を見事に予告している。[23] 一方、「いとほし」という形容詞は、自身または他者のおかれている望ましくない状況に関して抱いた困惑・つらさをあらわす。それは他者に対して心が向かってゆかない状態、すなわち心と心の間に「へだて」があるのと同じ、もしくは近似する状態といえるのではないか。

以上、これまでは他者への同情などをあらわす語と解されることがほとんどであった「いとほし」の語義のとらえなおしによって、この語が「総角」巻の薫、大君、中の君、弁といった人たちの惑いと、関係の隔絶という問題にそのまま直結してゆくことを論じた。

※『源氏物語』の本文は『大島本　源氏物語』（角川書店）に拠り、私に校訂した。また、各本文末尾の（　）内に『源氏物語大成』校異篇（中央公論社）の頁数を付した。

※『源氏物語』諸注釈書の略号は、**「全書」**＝『日本古典全書　源氏物語六』（朝日新聞社、一九五五年）、**「大系」**＝『日本古典文学大系17　源氏物語　四』（岩波書店、一九六二年）、**「玉上評釈」**＝『源氏物語評釈第十巻』（角川書店、一九六七年）、**「全集」**＝『日本古典文学全集16　源氏物語　五』（小学館、一九七五年）、**「集成」**＝『新潮日本古典集成　源氏物語　七』（新潮社、一九八三年）、**「佐伯講読」**＝『源氏物語講読中』（武蔵野書院、一九九二年）、**「新大系」**＝『新日本古典文学大系22　源氏物語　四』（岩波書店、一九九六年）、**「新全集」**＝『新編日本古典文学全集24　源氏物語　5』（小学館、一九九七年）、**「鑑賞」**＝『源氏物語の鑑賞と基礎知識32　総角』（至文堂、二〇〇三年）。

注

（1）陣野英則「「物語」の切っ先としての薫――『源氏物語』「橋姫」「椎本」巻の言葉から――」（『國語と國文學』八五―六、東京大学国語国文学会、二〇〇八年六月）。

（2）陣野英則「弁の尼を超える薫――『源氏物語』「宿木」「東屋」巻の言葉から――」（小山清文・袴田光康（編）『源氏物語の新研究――宇治十帖を考える』新典社、二〇〇九年）。

（3）松岡智之「多弁と寡黙、あるいは沈黙」（関根賢司（編）『源氏物語　宇治十帖の企て』おうふう、二〇〇五年）において、主要論文が紹介・整理されている。

（4）注（1）、前掲の拙論。

（5）注（2）、前掲の拙論。

（6）用例数は、『源氏物語大成』ならびに『CD-ROM 角川古典大観源氏物語』を併用して確認した。なお、「いとほし」からの派生語として、「いとほしがる」「いとほしげ」「いとほしさ」「いとほしみ」、それに「なまいとほし」も含めている。

（7）『源氏物語』における「いとほし」については、「『源氏物語』の「いとほし」」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五六―三、二〇一一年二月刊行予定）を執筆中である。また、『源氏物語の展望　第十輯』（三弥井書店、二〇一一年九月刊行予定）に掲載される論考で、『源氏物語』以前の「いとほし」の用例もあわせて網羅的に検討する予定。

（8）北山谿太「語釈研究三つ――さるものにて・いとほし・案内――」（『解釈』二―二、解釈学会、一九五六年二月）、後藤貞夫「源

氏物語における「いとほし」の意義用法について」（『国文学攷』二三、広島大学国語国文学会、一九六〇年五月）、木之下正雄『平安女流文学のことば』（至文堂、一九六八年）、中川正美「源氏物語における「いとほし」と「心苦し」」（国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究　一』和泉書院、一九八〇年）、池田節子「いとほし」（秋山虔（編）『王朝語辞典』東京大学出版会、二〇〇〇年）など。

(9) 濱橋顕一「「さし当りていとほしかりし事の騒ぎ」――「いとほし」の語義のこと」（鈴木一雄（監修）河地修（編）『源氏物語の鑑賞と基礎知識21　常夏・篝火・野分』至文堂、二〇〇二年）、及び同「「いとほしう人々も思ひ疑ひける筋」――「いとほし」の語義のこと」（鈴木一雄（監修）仁平道明（編）『源氏物語の鑑賞と基礎知識37　真木柱』至文堂、二〇〇四年）。

(10) 宮地敦子「類義語の交錯――「いとほし」「かはゆし」ほか」（『心身語彙の史的研究』明治書院、一九七九年）。

(11) 注(8)、前掲の中川論文。

(12) 注(8)、前掲の木之下著書、Ⅲ―9。

(13) 吉澤義則『源語釈泉』（誠和書院、一九五〇年）。なお、吉澤義則『對校源氏物語新釋　巻五』（平凡社、一九三九年）の「総角」巻で、「いとほし」の注記（全十八箇所）のうち、困惑・つらさの意に解しているのは一例（三節の引用本文⑲）だけである。

(14) 注(8)、前掲の池田論文。

(15) 松尾聰『源氏物語を中心とした「うつくし・おもしろし」攷』（笠間書院、一九七六年）、同『松尾聰遺稿集Ⅰ　中古語「ふびんなり」の語意』（笠間書院、二〇〇一年）なども、一語にひとつの語義が対応するという見方にもとづいた考証であった。

(16) 今井久代「「御髪のこぼれかかりたるを掻きやりつつ見たまへば――男と女のはざまには・大君と薫の恋物語」（『國文學』四五―九、學燈社、二〇〇〇年七月）。

(17) 針本正行「「総角」巻の大君」（『平安女流文学の表現』おうふう、二〇〇一年）。

(18) 注(8)、前掲の中川論文。

(19) 三田村雅子「大君物語――姉妹の物語として――」（増田繁夫・鈴木日出男・伊井春樹（編）『源氏物語研究集成　第二巻　源氏物語の主題　下』風間書房、一九九九年）。

(20) 中川正美「源氏物語続編の文体――「うし」から「心うし」へ――」（『源氏物語文体攷　形容詞語彙から』和泉書院、一九九九年）。

(21) 池田節子「大君の結婚拒否――朝顔の姫君・落葉の宮・紫の上からの連続――」（『源氏物語表現論』風間書房、二〇〇〇年）。

(22) 注(1)、前掲の拙論。

(23) 神田龍身「分身、差異への欲望――『源氏物語』「宇治十帖」――」（『物語文学、その解体――『源氏物語』「宇治十帖」以降』有精堂出版、一九九二年）など。